

△資料翻刻▽ 小野勝年遺稿宸翰雜集記註(二)

信 廣 友 江

本稿は、「資料翻刻」小野勝年遺稿宸翰雜集記註(一)、「安田女子大学紀要」第三十九号)に続くものである。同資料は未定稿であるため、原著者の推敲中に生じたと思われる未調整部分がある場合は、最小限の修正を施している。また、訓読法の漢字表記に不統一があるが、原文のままにしておく。漢字は原則として新字体により表記した。なお、記註の内容に関連する文字については、『雑集』原本の異体字をそのまま記載した。

孟欄何所^レ為、目連特報^レ恩。異鳥皆同^レ勢、衆花並共^レ根。山形無^二曲直^一、樹木異^二寒温^一。魚蟻時行住、竜蛇或踞蹲。寄^レ語慈悲子、当^レ修^二此法門^一。

慧日空名^レ慧、慈悲詎見^レ慈。芥城無^二歲月^一、生路有^二年時^一。幾人能點慧、何者不^二愚癡^一。別置^二須弥石^一、懸以^二藕中糸^一。

孟欄^①は何によりてかなすところぞ。目連^②がとくに恩に報ぜんがためなり。異鳥^③は皆勢^④を同じくし、衆花ならびに根を共にす。山形には曲直なく、樹木は寒温を異にす。魚蟻は時に行き住まり、竜蛇あるいは踞蹲^⑤す。語を寄す、慈悲子^⑥よ、まさにこの法門^⑥を修むべし。

① 孟欄。梵語 Ullambang。烏藍婆拏また孟蘭盆。漢訳して倒懸。死者が地獄で倒懸の苦を受けているのを救わんがため、七月十五日(安居の終った日)に行なった法会。

② 目連。Maha-naudgalyayana(摩訶目犍連)。仏十大弟子の一人。神通第一と称せられた人。「孟蘭盆経」に、目連が死んだ父母を得度して、育成の恩に酬んとしたところ、母は地獄に落ち、餓鬼中であって、飲食物なく、瘦せて骨ばかりであったので、仏に請い、七月十五日、自恣のとき、百味の飲食物を仏および僧侶に供養する法会を行うべきことを教えられたので、それにもとずいて先亡の滅罪に資すけたと説かれている。孟蘭盆会の举行は中国では梁の武帝の大同四年(五三八)、わが国では推古十四年(六〇六)がはじめという。

③ 異鳥以下竜蛇踞蹲まで。地獄の有様の形容。

④ 踞蹲。蹲踞というに同じ。うづくまること。蛇。蛇の俗字。

⑤ 慈悲子。慈悲を求めんと願う仏弟子たち。

⑥ 法門。梵語 Dharma-paryaya の訳。仏法の教理のこと。法は仏教の真理であり、教法は真理をさとする手段であって、しかも、真理にいたる入口、すなわち門に当たるところから法門という。

転じてさとりに導く経典や教判の義ともなった。

慧日^①を空しく慧と名づければ、慈悲はいづくんど慈なるを見さんや。芥城^②には歳月なきも、生路には年時あり。幾人ぞ黠慧^③を能くし、何者ぞ愚癡^④ならざる。別に須弥石^④をおきて、懸くるに藕中の糸^⑤を以ってせん。

①慧日。仏智が世の冥旨を照らすので、仏を日にたとえていう。

仏を慧日というが、そのことが単に空名であるならば、慈悲もまた示現されないであろう。しかし仏の智慧も慈悲も真実であつて、いつわりがない。

②芥城。劫量をたとえたもの。百由旬四方の城の中に芥子を満たし、長寿の人が来て百年に一度一粒の芥子をもち去ると、遂には芥子が尽きることはあるが、それは驚くべき長時間を要する。そうした無限ともいふべき絶大な長時間を形容する。劫石の条の注参看。要するにこの句は、時は無限であるが、人生には限りがあるをいう。生路。生涯、人生ということがごとし。

③黠慧。わるがしこい智慧。

④須弥石。須弥山を形成する多数巨大な石。

⑤藕糸。はすからひき出した糸。藕断糸連といひ、糸弱くして表面は断絶するも、情意の未だ絶えざるにたとえる。ここには仏の智慧と慈悲により、黠慧・愚癡の輩も救済される因縁のあるを詠じているのであろう。

大道三乘異、生途六趣分。習種猶須^レ習、重修尚待^レ重。有無還^レ有^レ二、聞見復聞々。欲^レ枯^二煩惱樹^一、先須^レ滅^二愛根^一。

別有^二遊^レ心地^一、蕭条那可^レ堪。白雲臨^二赤峯^一、青天依^二淥潭^一。豈復^レ闍^二北^一、非^二唯恒水南^一。誰敢^二同携^レ手、榮名非^レ所^レ食。

校字。那。作那。

大道^①は三乘^②を異にし、生途も六趣^③を分かつ。習種^④ありといえども、猶すべからく習うべし。重ね修むるといえども、なお重ねんことを待つ。有と無とまた二つあり、聞見するもまた聞々^⑤せよ。煩惱の樹を枯らさんと欲すれば、先ずすべからく愛根^⑥を滅^⑥すべし。

①大道。大きな悟りの道。

②三乘。人をのせて悟りの道を運しめる故に、乗(のりもの)にたとえる。大乘小乗など一よりして五乗の別があり、ここに三乗とは声聞乗・縁覚乗・菩薩乗をいひ、それぞれ異なる乗物ではあるが、目的地は一なりということがごとくである。

③六趣。六道と同じ。生途は胎卵湿の三生の方をいうか。生きとし生くるのみち。生きる道には種々あるをいう。

④習種。梵語 Samudānāṃ gotraṃ の訳。後天的に悟りを証得すべき性質。先天的なものを Prakṛti-stham 性種というに對して用いられる。併せて性習二性という。この一句は悟りを求めてますます精進するをさす。

⑤聞々。ここには仏説の有無の法に重ね重ね耳をかたむけよというにある。

⑥愛根。愛欲の煩惱。これが根本となつて他の煩惱を生ずる故に愛根という。

別に心と遊ばしむの地あり、蕭条^①としていかんぞ堪うるべけんや。白雲は赤県に臨み、青天は淥き潭^②による。あにまた耆闍^③の北ならんや、ただ恒水^④の南のみには非ず。誰か敢て同じく手を携えんや、榮名は貪るところにあらず。

①遊心地。悟りを求める心の場。蕭条。ものさびしいありさま。

遊心地は常寂の場であることを形容しているのであろう。俗界の喧騒のところとは異なるの義。

②赤県。赤県神州などといい、中国の美称に用いるも、ここには淥潭に対して明るい場所を指す。淥潭。きよらかなふち、淥は緑と音通、赤県の対句として用いる。清浄な悟りの境地（楽土）、すなわち遊心の地を示す。

③耆闍。耆闍崛。摩伽陀国王舎城北の靈鷲山にあり、釈尊説法の地。

④恒水。ガンジス河。その河の中流地域はブダガヤなどがあり、釈迦の布教の聖地である。この句は、虚栄でなく、まことの悟りを求めて、相たずさえて精進するならば、いたるところに淨らかな遊心の楽土が見出されるとするのであろう。

地獄唯居^レ地、天人旧在^レ天。苦樂雖^レ殊^レ致、俱非^二上福田^一。生々何未^レ絶、火宅火恒然。須^レ歸^二不二処^一、先入^二第三禪^一。

涙流成^二大海^一、積骨似^二須弥^一。尚有^二怨憎会^一、非^レ無^二愛別離^一。色塵終是色、羈鎖復相羈。飄飄苦海上、恒被^二業風吹^一。

地獄^①は唯、地に居り、天人^②はもと天にあり。苦と楽とは致^{おもむき}殊^{こと}にす^③といえども、ともに上福田^④にはあらず。生々^⑤何ぞいまだ絶たざる、火宅の火は恒に然ゆるを。すべからく不二のところ^⑥に歸り、先ず第三禪^⑦に入るべし。

①地獄。三類ある。(1)根本地獄＝八大地獄・八寒地獄。(2)近辺地獄＝十六遊増地獄。(3)孤独地獄。いずれも下界にあり、苦痛の場である。

②天人。天上の人。天界の生類の総称。安樂のところ。

③殊致。致はおもむき。殊は異り、不一致のこと。

④福田。供養によつて受けることのできる福報の地。農民が田に播種して収穫をうるのと同じである。

⑤生々。生きつづけること。「楞嚴經」卷三に、生死し生死し、生々死々、旋ぐる火輪のごとく、未だ休息あらず。続いて断絶しないこと。ここでは煩惱世界に執着することをさす。

⑥不二処。唯一絶対のところ。仏法の根本を指すのであろう。「維摩經」に入不二法門品があり、「心經」の「色即是空、空即是色」を有空不二という。

⑦第三禪。第三難禪ともいう。禪によって無上のさとりを得ること。あるいは三界中の色界禪天があり、その中に第三禪天がある。これがまた少浄・無量浄・遍浄の三天に分かれる。淫食の二欲を離れた物質世界の一という。

涙^①の流れも大海を成じ、積骨は須弥に似たり。なお怨憎の会^②あり、愛別離^③なきにあらず。色塵^④も終は是色にして、羈鎖^⑤また相羈^⑥のみ。飄飄^⑦たり苦海の上、恒に業風の吹くを被る。

①涙。涙のごときわずかの流れも、集れば大海となる。積骨。死者の白骨の多きをいう。この二句は人間の煩惱の多きを暗示する。

②怨憎会。五苦の一。恨み憎む人、忌み嫌う事物に会わないではいられない苦。

③愛別離。五苦の一。親愛する者と離別する苦。

④色塵。四塵または六塵の一。衆生の情や識を汚染するもの。

⑤羈鎖。きずなのくさり。つなぎまとももの。

⑥飄飄。飄揺と同じ。ひるがえりあがること。曹植「洛神賦」に「飄飄として、流風の雪を廻らすごとし」と見える。

⑦業。身口意の所作。その善性悪性は必ず果報をうけるから、これを業因という。過去のを宿業、現在のを現業という。この一首は、世俗のきづなを断つを得ず、煩惱に悩みながら、悟りに入るを得ない世俗の姿を詠じている。

苦海非^レ無^レ苦、煩河一種煩。六賊還同賊、四怨長見^レ怨。未^レ使^二心暫望^一、空悲^二耳目喧^一。腹中無量事、何須^二白^レ仏言^一。

□^{〔苦カ〕①} 悩非^二常苦^一、憂悲異^二種憂^一。 □^{〔愛カ〕②} 河皆有^レ愛、愁林併是愁。如^レ是何時是、貪求尚自求。若欲^レ帰^二静処^一、知^三心如^二水流^一。

校字。①□。案一字脱落、疑苦歟。②□。案一字脱落、疑愛歟。

苦海は苦なきを非とし、煩河も一種の煩なるのみ。六賊^①もまた同じく賊にして、四怨^②は長えに怨みを見す。いまだ心をしてしばらくも望^③ましめず、空しく耳目の喧^{かまひす}しきを悲しむ。腹中の無量の事、何ぞ仏に白^{もち}して言うをもちいんや。

①六賊。智慧を害し、功德をそこねる六種の根(眼・耳・鼻・舌・身・意)、一に六塵ともいう。「楞嚴経」卷四に、この六を賊媒となし、自ら家宝をおびやかすとみえる。

②四怨。四魔(後註)と同じく、四種の障害に対する怨みの心という。

③暫望。暫はわずか、短少をいう。望はここには悟り、解脱の願望。要するにこの一首は、何処にもなやみやうらみがあるのに、自らそれを少しも克服しようとしないうちは、どうして仏に訴えようぞという義を詠じたもの。

〔苦〕^① 悩も常苦には非らず、憂悲は種憂に異る。〔愛〕^② 河は皆愛

有り、愁林ならびにこれ愁う。かくのごとくなれば何れるときか^{よろし}からん、貪求なおも自ら求むるを。もしも静処に帰らんと欲すれば、心は水流のごときを知らん^③。

①この一首は憂・愁・求・流の四字が押韻であるから、「苦」悩と「愛」河の二字の脱落とみて補った。

②種憂。種は種子・種類。種憂はもとに乃至多様な憂いで、それから異った憂い悲みが生れるものになるもの。この一首は苦悩・愛慾何れも恒久不変のものではなく、心の持ちかたによつて生れることを詠じている。

③心如^二流水^一。「華嚴」にいわゆる「心如^二工画師^一」という発想に似ている。

形骸成^二大地^一、乳汁似^二長河^一。念々皆生滅、心々有^二刹那^一。空悲^二浮^レ水沫^一、終是赴^レ灯蛾。為^レ居^二三界裏^一、常畏^二五旃陁^一。

欲^レ知^二身是火^一、觀^二土自如^レ金。若須^レ浮^二慧海^一、宜^三早出^二愁林^一。一劫山方大、百年龜尚沈。必辞^二煩惱熱^一、当^レ帰^二仏樹陰^一。

形骸は大地を成じ、乳汁は長河に似たり^①といえども、念々にみな生滅し、心々は刹那たり。空しく水に浮ぶの沫を悲しむごとく、終にこれ灯におもむくの蛾のごとし。三界^②の裏に居るがために、常に五旃陁^③を畏るべし。

①大地を生成するような巨人、長河のごとき乳汁を出す大女であつても、人である以上は生滅はまぬがれず、泡沫のごとくはかなく、灯に集つて焼死する蛾のごときはかかないものである。

②三界。衆生が居るところの世界、欲界・色界・無色界。その他、断界・離界・滅界あるいは法界・心界・衆生界のごとし。

③五旃陁。五つの大悪。殺生・偷盜・邪妊・悪口・飲酒を指す。これらは煩惱によつて作られる行為である。

身はこれ火のごとくなるを知らんと欲し、土は自ら金の如くなるを觀^{かん}ず^①。もし慧海に浮ばんことをもちいなば、宜しく早く愁林を出づるべし。一劫の山^②は方に大なれど、百年の龜^③なお沈まん。必ず煩惱の熱を辞^さりて、まさに仏樹^④の陰に帰るべし。

①火・金。身体は煩惱の火、あるいは火宅のごとく燃えてしまうもの、大地もまた黄金乃至金属のごとく堅固であるが五行の理によつて相生相克する。

②一劫山。劫は時間の最大単位。ここには大山をいい、その大山すらなお崩れて海となるを暗に云う。

③百年龜。百年の盲龜をいう。「雜阿含經」第十五に、「たとえは大地のごとく大海となるに、一盲龜あり、寿無量なり。百年に一たび頭を出だす。海中に浮木あり、ただ一孔のみあり、盲龜百年にひとたびその頭を出だし、まさにこの孔を出ずるべきや否や」とみえる。値仏聞法の難きにたとえていう。比喩に用いるが、ここには非常に広大な場所であり、無量寿である生

物もなお有限で、永遠というわけにはゆかない。これを解脱するの道は仏法に帰依すべきであるとするにある。

④ 仏樹。菩提樹。仏の説法の場所を指す。

四蛇俱有^レ毒、三業並無^レ明。醉鳥由^レ疑醉、盲龜本自盲。戲猿遊未^レ住、心水去無^レ停。會得^二於難^一得、從生不^二復生^一。

撮^レ沙投^二海水^一、擲^レ芥向^二針鋒^一。禽獸歸^二何路^一、天人隔^二幾重^一。稟^レ形雖^レ有^レ処、生滅意無^レ蹤。盲龜不^レ見^レ物、浮木若為逢。

四蛇^①ともに毒あり、三業ならびに明なし。^② 醉鳥^③は疑^{うたが}に由りて酔い、盲龜^④は本自^{おのづ}から盲たり。戲猿^⑤は遊びていまだ住^{とどま}らず、心水^⑥は去りて停るなし。會^からず得^えがたきにおいて得るも、從生^⑦(ひと)は復生(よみがえる)せず。

① 四蛇。四大、われわれはじめ、すべてを構成する要素、と同じ。毒蛇の加害するように、この四つのもので構成されたものが相害されて、遂に滅亡にいたらしめるところからたとえたもの。「涅槃經」第一に「自ら己が身を觀すること四毒蛇のごとし」、同第三に「王有り、四毒蛇をもつて一篋に盛り、人をして瞻養せしむ」とある。その他、「雜喻經」「譬喻經」「最勝王經」第五「智度論」第一二などに見ゆ。

② 三業無明。心口意のはたらきをほしのままにすることによって罪惡におちいること。

③ 醉鳥。典拠未詳であるが、醉象のごとく悪業をふるうことを鳥にたとえたものか。

④ 盲龜。濟度しがたいものにたとえる。

⑤ 戲猿。心の奔放制禦しがたいことを猿にたとえているのである。意馬心猿のごときである。

⑥ 心水。心は水が影をうつすようにあらゆるものをうつし、また水が流れ動くように外のものによって動揺し、また水が清むこともにごることもあるところから心の水という。

⑦ 從生。衆生というに同じ。「逸周書」文伝解に「もろもろの横生はことごとく從「生」を養い、從生はことごとく一丈夫を養う」とあり、人民が天子を養うの意味とする。復生。復活の義。

沙を撮みて海水に投じ、芥を擲げて針の鋒に向わしめんとす。禽獸は何の路を帰り、天人^①は幾重^②を隔つぞ。形を稟けて処^おありといえども、生滅^おは意^{おも}うに蹤^{あと}づけるなし^③。盲龜は物を見ず、浮木は若^{いすくん}ぞ逢わんや^④。

① 禽獸・天人。動物や天人はそれぞれ自由に行動し、人が自由に制御はなしえないとするのであろう。

② 幾重。重は直容切(チョウ)。重は直容切(チョウ)。

③ 生滅意蹤。生滅のことは人意の決定しうるものではない。

④ 盲龜浮木。世に生れるに人の身の受けがたく、たとえ人として生れるも仏法にたいがたきを海中の盲龜が浮木にありにたとえる。前注「百年龜」参看。

出家須^レ離^レ家、修道宜^レ知^レ道。生輪雖^二復生^一、老岸今方老。無為一切為、造化知^二何造^一。若能愁^二四魔^一、自可^レ歸^二三宝^一。

試折^二十方草^一、皆為^二四寸籌^一。尚見^二狂風猛^一、猶如^二愛水流^一。大海無辺大、浮囊且未^レ浮。欲^レ澄^二生死浪^一、宜^レ取^二涅槃舟^一。

出家はすべからく家を離るべく、修道はよろしく道を知るべし。生輪^①、また生るといへども、老岸^②は今まさに老いんとす。無為^③こそ一切となり、造化^④は何をか造ると知らんや。もしよく四魔^⑤を愁えなば、自ら三宝^⑥に帰すべし。

① 生輪。輪廻転生、あるいは年々植物などの生じては枯れ、繰返すこと。

② 老岸。年老いて到着した岸辺。

③ 無為。「中庸」に「無為して成る」といい、「老子」に「無為にして治らざるはなし」とあり、仏教では有為と対象し、因縁所産の作為のないことを指す。

④ 造化。創造化育の略。「淮南子」精神訓に「倖なるかな造化なるもの」とあり、造物主または天地、乃至陰陽をいう。

⑤ 四魔。四種の障害。天魔・煩惱魔・陰魔・死魔の四つの悪は因縁果報。「勝鬘經」に、「如来は無上の調御をもって、四魔を降服す」と見ゆ。

⑥ 三宝。仏法僧、要するに仏教。「十七条憲法」第一にも篤敬三宝とある。

試みに十方の草を折りて、皆四寸の籌^①をつくらんか。なお狂風の猛^②り、なお愛水^③の流のごときを見ん。大海はかぎりなきの大といへども、浮囊^④をしてかついまだ浮^⑤かばしめざらん。生死の浪を澄ましめんと欲すれば、よろしく涅槃^⑥の舟をとるべし。

① 籌。竹の棒で作った数とりの道具。十方の草を用いて長さ四寸の籌（かずとり）をつくるならば、限りなく多くを数える手段がえられる。

② 愛水。一に愛河といい、苦悩を河水にたとえる。ここには世の中には数えきれない多くの愛別離苦が狂風のたけるとく存在している。これを克服するために涅槃という悟りの舟に乗るべしというにある。

③ 浮。韻は房无切（ホウ）または普溝切（ヒウ）である。

奉^レ讚^二浄土十六観^一詩 十三首

① 浄土の十六観を讚えたてまつるの詩。作者は未詳。浄土。清浄なる国土または国土を清浄にするという義。対応する梵語はなといわれているが、思想としては大乘仏教にもなつて発達した。国土もまた仏の国土の義。隋の慧遠「大乘義章」巻一九に「浄土というは経中に、あるときは名づけて仏刹となし、あるいは仏界と称し、あるいは仏国といい、あるいは仏土といい、あるいはまた説いて淨刹、淨界、淨土となす」とある。浄土は極楽 (Sukhavati) と結びついて、阿弥陀仏・無量寿仏、あるいは

は無量光仏の居所のこととなった。そしていわゆる浄土三部経はこの極楽浄土の有様のことやそこに衆生が往生するための手段を説いている。中について、「観無量寿経」一卷は、一に「無量寿観経」とも「観経」ともいい、劉宋の曇良耶舎の訳出するところと伝えられている。概要は王舎城の太子阿闍世が父頻婆沙羅王と夫人韋提希を殺害しようとしたが、果さず、彼等を深宮に幽閉したとき、釈迦が王宮内に身をあらわして、夫人の願いに応じて、極楽浄土をあらわし、往生の法を説いた。ここに示めされた具体的方法をいわゆる三福十六観と名づける。三福とは父母に孝行し、師長に奉事し、慈みをもつて殺生せず、二は仏法僧に帰依し、戒律を守り、三には悟りを求める心をおこし、大乘の経典を読み、他にもこの道をすすめることをいう。十六観とは十六種類の、心を一筋にし、思念を集中して極楽浄土を観想する方法である。すなわち一が日想観、二に水想観、三に地想観、四に宝樹観、五に宝池観、六に宝樓観、七に華座観、八に像想観、九に偏観一切色身想観、十に觀世音観、十一に大勢至観、十二に普観、十三に雜想観、十四に上輩上生観、十五に中輩中生観、十六に下輩下生観という。このうちの十三観を定善観、残りの三観を散善観といい、前者は禅定して観想するをいい、後者は悪をやめて善を修める法である。

②この詩は十六観中、十三首とかかけ、(一)宝池観(5)、(二)宝樹観(4)、(三)宝樓観(6)、(四)捨観(6)、(五)像観(8)、(六)法身観(9)、(七)華座観(7)、(八)觀音観(10)、(九)勢至観(11)、(十)捨二菩薩観(12・13)、(十一)上品観(14)、(十二)中品観(15)、(十三)下品観

(16)を掲げている。すなわち、(一)日想、(二)水想、(三)地想の三観を欠き、その名称の異ったところもある。「観経」にもとづいて描く浄土変相にあつては十六観相図を外周にめぐらす構図で、唐代にあつてはなほだ流行した。ただし、この詩はかかる図相に対して詠ぜられたものではないようである。

宝池観

宝池唯露影、浄水自含香。鳥音真諦演、波声妙法揚。苦空問覺雁、常樂噪鴛鴦。修因本東刹、成聖在西方。

宝樹観

枝々碼磳葉、樹々水精林。波流宣秘法、風行説妙音。天人俠道側、童子坐花心。行願方無倦、光明時見臨。

校字。①磳。作磳。

浄土の十六観をたたえたてまつるの詩①。十三首②。

宝池観①

宝池ただ影を露すのみといえども、浄水は自ら香を含む。鳥音は真諦②を演べ、波声は妙法③を揚ぐ。苦空④をば覺雁⑤に問い、常樂⑥は鴛鴦を噪がす。因を修むるは東刹⑦にもとづくも、聖を成ずるは西方にあり。

①宝池観。一に八功德水想ともいう。「観経」所説十六観中の第五。極楽浄土に八功德池水があり、その水は摩尼水といい、蓮華の間を流れ、苦・空・無常・無我・諸波羅蜜を演説するといふ。

②真諦。二諦（俗諦と真諦）の一。聖智所見の真実の理性。

③妙法。すぐれた、または正しい法。「法華経」の Saddharma にあたる。

④苦空。「観経」は苦と空とを分ける。註①。ただし、ここには常楽の対句。

⑤鳧雁・鴛鴦。鳧は鳧（かも）の俗字。鳧雁（かもとかり）は季節によって来去する、いわゆる候鳥。鴛鴦はおしどりの雌雄で、常に離れないところから、極楽鳥に擬され、第五観においては如意珠玉の光明が化して百宝色の鳥となり、その声は和鳴哀雅なりとあり、鳧雁・鴛鴦はこれを指すと解される。ただし、両鳥の典拠は第八観に「この想成る時、行者まさに水流・光明および諸宝樹と鳧雁・鴛鴦のみな妙法を説くと聞くべし」とあるによる。

⑥常楽。ここには極楽浄土をいう。

⑦東刹。東方の寺院。西方（極楽浄土）の対句で、「無量寿経」には無量寿仏の威神光明が東方の恒沙の仏刹を照す云々とある。ここには世間の寺院というに同じ。因と聖の語を用いて善因と聖果を対せしめている。

宝樹観^①

枝々は瑠璃^{めろ}の葉、樹々は水精の林たり。波流は秘法を宣^{のたま}べ、風行は妙音を説く。天人は道側に俟^{まち}つき、童子は花心に坐す^②。行願^③まさに倦^うむことなくして、光明は時に見臨す。

①宝樹観。十六観中の第四。その宝樹は七宝の華葉を具足せざることなく、瑠璃の色の中より碑礫の光を出し云々とある。水精の林は瑠璃の葉に対する作者の潤色。波流・風行もまた同じ。

②ここには天人と童子に分けているが、経文は諸天の童子としてゐる。

③行願。身の行ないと心の願い。ことに菩薩は四撮・六波羅蜜・十波羅蜜などの行と四弘誓願・十六願など実現して、衆生救済の利他を行ぜんことを願う（「無量寿経」）。

宝楼観

宝楼遥带^レ地、金鈴懸^二処空^一。昭色殊^二清白^一、分^二明珠紫紅^一。鳥音但演^レ法、五楽共揺^レ風。敢欣^二无量寿^一、神足暫来^レ東。

捨観

先観^二日下処^一、後念^二水流澄^一。冰色金如^レ玉、瑠璃漸^二曜灯^一。池鳥宣^二希有^一、楼風演^二未曾^一。無為既寂定、不変且常恒。因^レ斯逢^二快樂^一、自^レ此離^①。怨憎^一。煩惱方須^レ尽、処^②空更可^レ騰。

校字 ①離。作離。②処^(註三)。案虚之誤、応作虚空。

宝楼観^①

宝楼は遙かに地に帶り、金鈴は虚空^②に懸る。昭色は清白を殊にし、珠^③と紫と紅とを分明す。鳥音ただ法を演べ、五楽^④はともに風を揺がす。あえて無量寿か神足^⑤もてしばらく東^⑥に来るを欣ぶ。

①宝楼観。第六観の総観の前文「衆宝国土の一一の界上に五百億の宝楼閣あり。その楼閣のうちに無量の諸天ありて天の伎楽を作す。また楽器あり、虚空に懸けおき、天の宝幢のごとく、鼓たげるにおのづから鳴る」とあるにもとづく。この観を行うときは宝樹・宝地・宝池を合せて観想して往生するので、総観ともよばれる。

②虚空。原文^{〔註四〕}処空につくるも、意をもつて改む。「楽器あり、虚空に懸処す」とあるに該当する。

③珠。宝珠の色。珠は朱と音通。ここには暗に朱と紫・紅の三色がそれぞれ区別されていることであろう。ただし、宝珠は「観経」では金色としている。

④五楽。五種の音楽。いろいろなよい音曲をいう。五楽は一般に五欲に対して快樂の義に用いられるが、ここではその意味ではない。「無量寿経」に「清風、時に発りて、五つの音声を出し、微妙の宮商、自然に相和す」とある。

⑤神足。神通力をもった足。五通の一。

⑥東。「無量寿経」には東南北上下に西方の無量寿仏国土と同じ仏国があつて、それぞれ諸仏がいるとしているが、ここでの東は西方極楽浄土に対して、俗世間を指していると解される。

捨観^①

先に日下^②の処を観じて、後に水の流れ澄むことを念ず。氷色の金は玉のごとく、瑠璃は曜ける灯を漸す。池鳥は希有を宣べ、楼風は未曾^③を演ず。無為にしてすでに寂定^④、不変にしてかつ常恒たり。これに因つて快樂に逢い、これより怨憎を離る。煩惱はまさに尽きるべく、虚空^⑤はさらに騰るべし。

①捨観。捨は総と通ず。「観経」では総観に作る。十六観中の第六。宝地・宝樹・宝池および宝楼閣を観じ、報土の全体を観じ終つた故に総観想という。

②日下。日の照らす下。すなわち天下。「爾雅」の积地日下の条の注に「日下は日の出ずるところをいい、その下の国なり」と見える。極楽国土の義。次句の水流以下池鳥までが宝池に該当し、楼風は宝楼閣を表徴する。

③未曾。未曾有の略。希有というに同じ。

④寂定。安心妄想を離れること。快樂。極楽浄土におけるたのみ。

⑤虚空。原本^{〔註五〕}処空に作る。前句の煩惱と対して処空では意味が通じがたく、虚空とすべきである。

像観

眼如^二四大海^一、豪^①類^二五須弥^一。座用^レ花相捧、行将^レ殿自隨。有^レ形還^レ有^レ応、無^レ動復無^レ為。豈唯無^レ上^レ土、方称^二正遍知^一。

校字。①豪。応作毫。但豪与毫音通。

法身観

大仙唯寂然、常住本無^レ年。未^レ能^レ知^レ処所、何足^レ弁^レ方円。虚空唯是界、實際略無^レ前。方称^レ「滅尽望」、呼作^レ「甚深禪」。

像観^①

眼は四大の海^②のごとく、毫^③も五須弥に類す。座すときは花を用いて相捧げ、行くときは殿を將^{たす}えて自ら随いたまう。形あり還^{また}応ずるあり、動なくして復^{また}無^な為^なたり。あにただ無上の士^④のみ、まさに正遍知^⑤を称^とえんや。

①像観。像想観のこと。十六観中第九。

②四大海。須弥山の四方にある大海。第九真身観に「さらに無量寿仏の身相と光明を観るべし。：仏心の高さは六十万億那由他恒河沙由旬なり。眉間の白毫は右に旋りて婉転し、「大いさ」五つの須弥山のごとし。仏眼は四大海水のごとく、青白にして分明なり」云々とある。四大海は須弥山をとりまく四方の海。

③毫。原文豪に作るは誤り。白毫をいう。上掲の白毫が右旋して五須弥山のごとしとあり、あるいは「無量寿仏の眉間の白毫は五須弥山のごとく、この相を見るものは自然に八万四千の相を見るをいうべし」ともある。ただし豪は毫と音通。なお、花と殿とは華座および宝楼観において観じたところ。

④無上士。仏の十号の一。無上の士夫の意。すなわち釈迦如来の

こと。

⑤正遍知。これまた釈迦の十号の一として用いる。もと等正覚(Samyaks ain buddha)の意訳といい一切の諸仏がごとくく知し、一切の衆生を開悟せしめる徳をたたえた尊号である。ここには釈迦と同じく、無量寿仏も等正覚であるというのである。像観の経文には「諸仏の正遍知海—海のように広大なさとり—は心想より生ず。このゆえに一心に念をかけて、かの仏を諦観すべし」云々と見える。

法身観^①

大仙^②はただ寂然たり、常住^③にしてもと年なし。いまぞよく処^おるの所を知る能わず、何ぞ方円^④を弁するに足らんや。虚空はただこれ界なりというも、實際はほほ前^{まへ}なし^⑤。まさに滅尽^⑥の望^とみを称^とえ、呼んで甚深^⑦の禪を作^なさん。

①法身観。仏真身想観のこと。一に真身観という。十六観中の第九で阿弥陀仏の真金色身とその光明を観ずる観法をさす。法身は報身・化身と合せて仏の三身といい、一般には真如法性をもち、無色無形とされているが、ここでは十方をあまねく照し、衆生を済度する具体の真身である。

②大仙。釈迦の別号。道を行じ、長生を求める人を仙といい、仏は仙の中で最も尊いので大仙というも、ここには無量寿仏を指す。

③常住。梵語 Nitya-Sthita の訳。つねに存在して生滅や変易するこ

とのない義。年無しは無量寿という義。

④方円。かたち（形態）または大きさ（範囲）などをいう。大小というがごとくである。「觀經」には無量寿仏の身は高さ六十万億那由他恒沙由旬とあり、これを容るる浄土の大きさをいう。

⑤無前。先のないこと。すなわち前後の界限のない境界である。

⑥滅尽。滅尽定の略。無所有處の染悪を離れた者が入る禪定をいう。

⑦甚深。法の幽妙にして深さきわまりないことの形容。

〔補註〕

(一) 原文は「闊」に作る。

(二) 原文は「宵」に作る。

(三) 原文は「處（処）」の異体字「處」に作る。

(四) 同右。

(五) 同右。

〔二〇一一・九・二九 受理〕